



伝えたい!戦争の記憶—戦後70年 応募資料・作品展

12月8日(火)~2016年1月16日(土)

「戦後70年—聞こう、語ろう。戦争のこと・平和のこと」をテーマに、今年1月から募集した「戦争の記憶」。戦時遺品(実物資料)、戦争体験の聞き取りレポート、戦争と平和をテーマにした作品、戦争体験記・絵など、125人から500点以上が寄せられました。

戦時遺品一つひとつは、いつ、だれが、どこで、どのように使って(持って)おられたかを丹念にお聞きしました。「なぜそこにいたのか」「何をしていたのか」「どう感じておられたのか」…と、その場面を思い浮かべることができます。

お寄せいただいた体験談には、一人ひとりの壮絶な戦争体験が語られています。体験を本にまとめられた方、子どもや孫への手紙という形でつづられた方…。それぞれの体験を、「いま話しておかなければ」「二度と戦争を起ささないために」という思いが強く響いてきます。

聞きとりレポートからは、初めて聞いた戦争体験に驚

きと悲しみとともに、体験者の想いをしっかりと受け止めていこうという決意が読み取れます。さまざまなジャンルの作品からも、平和を希求する一人ひとりの方の気持ちがひしひしと伝わってきます。

応募いただいたすべての方の作品、資料を展示します。それらが語る、平和への深い思いを受け取ってください。

*応募いただいた資料などは、今後も「ピースあいち」で活用していきます。



関連イベント

12月12日(土) 1階交流のひろば

●話そうよ!戦争のこと・平和のこと

13:00~14:30

「戦争の記憶」に応募してくださった方、そして企画展を見てくださった方、「ピースあいち」に集まれ!伝えたいこと、感じたこと、考えたこと…今だから、語り合おう!

参加無料 *入館料は必要です。

●戦後70年 天野鎮雄が読む

村上春樹著「辺境・近境」から
「ノモンハンの鉄の墓場」

15:30~16:30

[参加費] 1000円(入館料含む) [要予約]



「戦争の中の子どもたち」展

2016年1月19日(火)~2月20日(土)

準常設展として、小・中学生の来館が多い2・3学期に「戦争と動物たち」とともに毎年開催することになりました。子どもたちに分かりやすい展示を、と毎回工夫を重ねてきましたが、大人の方たちにも分かりやすいと評判です。前回からは、名古屋市教育センターおよび名古屋市や近隣の市の小学校の協力をいただいて、国民学校時代の子どもたちの写真や資料をパネルに取り入れています。写真や資料の出典にもご注目いただければ幸いです。



「名古屋大空襲」展

2016年2月23日(火)~3月12日(土)

三菱の航空機工場への爆撃からはじまり、名古屋市街地を焼き尽くし、最後は模擬原爆パンプキンの投下に至った名古屋大空襲。今年「ピースあいち」に寄せられた資料や証言を、日本側の公的資料や米軍資料などで検証します。『あとかたの街』完結記念パネル、愛知県下の戦争遺跡の紹介もあります。



報告

オペラと日本の歌を堪能 ピースコンサート 9月19日(土)

「芸術の秋」にふさわしい恒例行事となった、名古屋二期会の皆さんによるピースコンサート。メンバーの方の時にユーモアを交えた軽妙な解説に心を和ませながら、満席の観客の皆さんがオペラの名曲に日本の歌にと心ゆくまで堪能されているようでした。平和であってこそこの芸術だと感慨もひとしおのひととなりました。

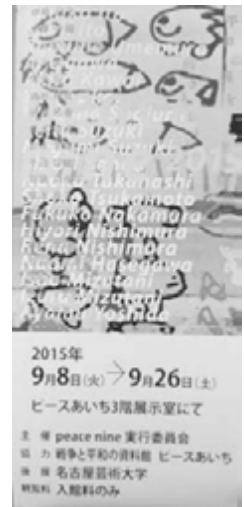


報告

PeaceNine2015巡回展 9月8日(火) ～9月26日(土)

2007年から名古屋芸術大学の有志によって行われている展覧会です。今年度は、学生、卒業生、職員、招待作家など19名が参加しました。戦後70年の節目今年度のテーマは「平和の種を蒔きましょう。私も種のひとつになりたい」。

「若さあふれるものばかりでした。理解できない部分もありましたが、平和だからできる表現。平和こそ未来にとどけたことだという表現者の気持ちが伝わってきて感動しました。」(アンケートより)



報告

フォーラム『SEALDsと考える・ピース&デモクラシー』を終えて

ずっと快晴だったのに、その日だけ雨。11月8日(日)、「ピースあいち」の新しい発想だったこのイベントに、いったい何人が足を運んでくれるのか、みんなが不安でした。

「ピースにSEALDsを呼びたい」と思い始めたのは、安保法案反対の運動が広がっても、異なる世代の間では必ずしも情報や気持ちが共有されていないように見えたからでした。SEALDsの若者たちのスピーチには、いつも戦争のことが出てきます。平和を願う彼らの行動の深いところには、戦争体験者への敬意が常に感じられました。若い世代の素敵な運動はピース世代の励みになり、上の世代のこれまでの歩みは若い世代の拠りどころになるのではないかと。互いが会おう場所を作れたら、と。

さて、呼ぼうとする相手は今をときめくSEALDs。ピースの威信にかけても、絶対にかっこよくしたい! デザイナーの大野恵さんの尽力で、鮮やかなピンクのフライヤー(チラシ)が完成し、このイベントの若々しさを象徴するものになりました。

東京のSEALDsからは元山仁士郎さんが来てくれました。宜野湾市出身の彼は、身体に染みついた戦争体験者の思いが自分を突き動かしていると語りました。この地で生まれたSEALDs TOKAIからは8人が来てくれ、活動の中での充実感やつらさなどを吐露。高校生戦後70年『未来』プロジェクトから実行委員長の日比野和真君が参加し、「平和とは、戦争がないだけの状態ではなく、差別や貧困がなく、誰もが平等に自己実現できる社会だ」と



SEALDsの元山仁士郎さん



鈴木忠男さん

語りました。司会席から見る参加者は、若者の本音トークに爆笑したり、うんうんと笑顔で頷いたり。

圧巻は、89歳の鈴木忠男さんが語る戦争体験と若者へのメッセージでした。「二度と戦争をしてはならない。君たちの必死の行動に感慨無量。これは平成維新だ」と。このとき100人近い人で埋まった会場が感動に包まれました。

若い人たちにつなぐバトンは、きっと渡せると感じた一日でした。(E. S)

報告 「戦争と若者 没後70年 竹内浩三の詩とその時代」展 7月21日(火)~8月30日(日)

会期36日間で観覧者2300人を超え、予想を上回る関心を集め、竹内浩三展と共に過ごした夏が過ぎました。

振り返ると企画会議は昨年末からスタートし、遺品を収蔵する本居宣長記念館と、遺族の方のご協力を得られ具体化へと進みました。展示作りと並行して浩三の故郷の伊勢市を訪れて生誕祭に参加したり、バスツアーで浩三を伝え残す活動をする方たちと交流の場を持つこともしました。浩三をより深く知るための過程は高い意欲となり、工夫をこらした展示が完成しました。

3階へ階段を上がると浩三の特大大写真タペストリーが窓を覆い、展示室に入る前からそこはもう竹内浩三の世界でした。序章は扉の外に。室内に入って第1部は浩三の代表的な詩「骨のうたう」など入隊前までの10作。2部は入隊後の「うたうたいは」などの詩5作。第3部は奇跡的に姉のもとへ遺された「筑波日記」2冊。第4部は浩三が戦死し書き残せなかったフィリピン戦とアジア・太平洋戦争の戦局の概説。第5部は「浩三と友人・家族たち」。そして「竹内浩三を伝える人たち」と続きました。展示物は詩や解説パネル48枚。浩三の書いた手紙やマンガや同人誌などの遺品資料が42点。浩三の肉筆は、ある観覧者の感想に「実物を見るとということの大切さを再認識した。浩三さんの文字が迫ってくる!」と書き留められていました。

70年前、豊かな感性を持ち将来を描いていながら



も、戦争でそれを断ち切らねばならなかったこの国の若者たち。再び戦場へ若者を向かわせることになっていいのか、と浩三の眼差しはまっすぐ私たちを見ているように感じました。

◀ 椙山女学園大学栃窪ゼミの協力によって制作された映像作品「ドキュメンタリー 竹内浩三の詩とその時代」を展示期間中上映しました。また、「竹内浩三オマージュI,II」と題した勉強会も開催しました。▶

関連イベント 『竹内浩三とわたし』講演会 8月22日(土)



『ぼくもいくさに征くだけけれど 竹内浩三の詩と死』(中央公論社)で、大宅壮一ノンフィクション賞を史上最年少で受賞されたノンフィクション作家の稲泉連さんを招いての講演会。以下はお話で印象に残った言葉です。

戦争体験者の言葉は理屈抜きで圧倒される。戦争体験者が少なくなり、「戦争をどう語り継ぐか」の時代が始まっている。戦死した浩三と彼の詩を知った年齢が同じ23歳であったことに「同世代」として、浩三の言葉に共感した。『金がきたら』『日本が見えない』『骨のうたう』といった自身を取り巻く「時代」や大きな流れを相手にした詩は、今を生きる自分に自然と寄り添ってきた。心のゆらぎ、震えみたいなものを感じた。

関連イベント 浩三の青春を歌い上げた 「岩瀬よしのりライブ」 8月2日(日)



曲目は、浩三詩の代表作「五月のように」「冬に死す」「骨のうたう」「わかれ」などを含め、15曲に及んだ。すべてご自分の作曲で、自らのピアノ伴奏で歌い上げられた。詩によって曲調は、軽快、荘重、滑稽などさまざまだったが、全体として自由奔放の感が強く、それこそが浩三の青春を映し出しているようだった。

平和へのメッセージ

平和憲法である「日本国憲法」が「戦争をしない」と決めているこの国を、今、安倍政権は「戦争ができる」国につくり変えようとしています。

これに対し、「SEALDs」(シールズ 自由と民主主義のための学生緊急行動)の若者たちが声を上げました。多くの女性たちもデモに参加し、女性週刊誌も「戦争と平和」をテーマとする特集を組んでいます。そこで、いろいろな分野で活躍されている女性の方々に平和への思いを寄せていただきました。

『はだしのゲン』—世界中の人に読んでもらいたい

坂東 弘美(『はだしのゲン』中国語版翻訳チーム)

父は1937年に上海の掃討戦を戦い、その後5年間湖北省の山村に駐屯し、詳細な写真と記録を遺しました。戦場の女性、子ども、老人まで機関銃で殺し、剣で刺し殺したと書き遺しました。どんな思いだったのでしょうか。

どんな兵士にも母親がいたはずです。「衛生兵でよかったね」「運送隊でよかったね」「食糧隊なら安心」などと胸をなでおろした母親がいたのでしょうか?

戦場まで兵士や武器を運んだ船、列車、トラックは誰が調達したのでしょうか? 怪我を治療して再び戦う兵士にしたのは誰でしょうか? 鋭気を得た食糧は誰が運んだのでしょうか? 慰問袋で軍人さんを讃える手紙を書かされた小学生たちは今はもう老人となり、可愛い孫に、当時の兵隊さんたちは勇ましくて、お国のために立派に死んだと伝えているのでしょうか? 安保法案で繰り返し

「後方支援だから大丈夫」という総理の真っ赤な嘘。それに追従する国会議員たち。腹だたしい思いです。



写真右側は『はだしのゲン』の作者、中沢啓治さん

私は今、『はだしのゲン』の中国語版を出版する準備を進めています。日中の政治環境の影響があつて困難はついてまわっていますが、主人公のゲンは戦争の全てを語っています。世界中の人に読んで欲しいと思っています。二度と「国家の安全のために」積極的平和主義とやらで人を殺し、殺される人間をつくらな

安保法は他者に対する敬意をこわした

長谷川 直美

(名古屋芸術大学非常勤講師)

九月、政府の安全保障法案のあまりにも強引な採決を見て、心が殺されてゆくような恐怖を感じました。国家の方針を変える重要な場面で、政府が醜態を世界中に曝しながら破壊したのは、「他者に対する敬意」ではないでしょうか。



また、多くの沖縄県民の想いを尊重することなく、大浦湾の豊かで美しい海を潰し、平和を保ってきた琉球文化に最もふさわしくない施設をつくらうとする強硬な姿勢には、恐怖と同時に恥ずかしささえ覚えます。沖縄においては、日本政府としての死者に対する敬意も、命に

対する敬意も全く感じられません。

国の在り方を、武力がはびこる世界の現実に近づけようとするのではなく、憲法前文が求める平和の理想に近づけ、世界に広げてゆく努力はできないのでしょうか。平和を愛する他の国々の公正と信義を信頼することで自らの安全を保持しよう、という姿勢の美しさは、破壊者には無用なのかもしれません。

平和に対する考え方は人によって様々なのですが、国自らが憲法も平和国家としての信頼も壊し、国を優先して個人を尊重しないこの時代にこそ、私たちは、人間の痛みや苦しみ、自らと他者の命に対する繊細で柔らかな感性と想像力を、国民一人ひとりが損なうことなく大切に保ち続けてゆかなくては、と思っています。

誰もが命の大切さを知っている

戦争とは、人を殺すこと、人間性が破壊されること。あいち女性九条の会は10年前の結成時、「命を生みだす性である私たち女性は、自分や大切な人を戦争の加害者や被害者にしないために、憲法第9条の改定に反対します。戦争につながるあらゆる権利の制限も許しません」とアピールした。

「愛する人を戦場に送らない」と聞くと、愛する人でなければいいの?と茶化したくなるが、肉親の病気に対して人はどれだけ必死になるか、見ず知らずの難病の「〇〇ちゃんの命を救うため募金にご協力を!」と街頭で呼びかける人もいる。誰もが命の大切さは知っている

平和の道しるべ「日本国憲法」

56年前、門司の中学校で、教育基本法やユネスコ憲章とともに「日本国憲法」前文を学んだ。ユネスコ憲章前文「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」は忘れ難く、「日本国憲法」の前文は、折に触れ読み直したい崇高な文章として心に残った。「われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。」この言葉を胸に刻み、平和主義・基本的人権の尊重・主権在民を柱にした国の基本法である「日本国憲法」を大切に、80歳90歳へと歩んでいきたい。

その憲法にそむく安保法が、9月19日、無茶苦茶な

憲法の平和主義の持つ意味

よく護憲派は「お花畑」と揶揄されますが、日本国憲法の平和主義というのは、そんな生ぬるいものではありません。国際紛争が起き、たとえ日本が武力攻撃を受けても、武力は絶対に使わない。武力による威嚇もせず軍隊も持たない。個別的自衛権肯定説もありますが、個別的だろうが集団的だろうが自衛権は「武力行使」ですから、憲法9条の文言上、放棄されていると読むべきでしょう。裏を返せば、日本が外国から攻撃され政権を崩壊させられ外国の勢力に傀儡政権を作られたとしても、民衆の力で取り返す、人権侵害に対して一人ひとりが抗って権利を勝ち取る、という宣言にほかなりません。

こんなに厳しく平和を求めるのは何のためでしょう

森 扶佐子

(あいち女性九条の会)

ると信じたい。

昨年末の特定秘密保護法や戦争法を作る過程で砂川判決が引用されるに及んで、古い話を思い出した。学校行事として市内の映画館へ行ったとき、本番前のニュース映画で砂川闘争が映し出された。米軍基地拡張反対の静かなデモ隊に襲いかかる警察官。乱闘! 突然涙が流れ出し止められなかった。「おまえ、なんでニュースで泣くの?」とワルの男子生徒にからかわれたが、涙を見られた悔しさが先に立ち、そのわけをうまく説明できずに終わった。今ならちゃんと説明できるのだが。

見崎 優子

(みずほ九条の会)



強行採決で成立した。無念でならない。正直、虚しさも感じた。しかし諦めたら負けだ。安保法案成立反対の立場で意見陳述をする野党議員をあざ笑うかのような与党議員の表情は忘れない。国のあり方を大きく変えようとする国会の場において真摯さ謙虚さの無い態度を許すことはできない。

微力だが無力ではない力があつまりつつある今、集団的自衛権の行使を許さず、戦争をしないという誓いを貫き通すために、日和らず自分にできる事を見つけ実践していきたい。

矢崎 暁子

(弁護士)



か。私たちを含む全世界の人が、権力によるあらゆる人権侵害から免れ、自分らしく人生を全うすること、それこそが憲法9条が厳しい姿勢で追求する平和です。そのために私たちはまず自分たちの国に「人権守れ」「戦争禁止」と厳しい縛りをかけてみせたのです。

平和主義の考え方は、自分たちの権利をどう守るのかに通じます。「国にお任せ」「睨まれたら怖いから黙って従う」ではなく、自分たち自身が権力の暴走に常に目を光らせて、場合によっては「お上」に盾突いてでも自分たちの人権を守る。それが日本国憲法の平和主義だと思います。

「充実した夏の語りシリーズ」を中心に

—2015年度上半期・語り手の活動

本年度は、終戦70年の節目の年。当時、二十歳前後の若者たちが戦場に送り込まれ、生き残ってその体験を語る戦場での体験者の年齢は90歳前後に達しています。その体験を語るには、もはや精神的にも肉体的にも限界にきていると言っても過言ではありません。

そうした状況から、今年の夏の戦争体験語りシリーズでは、軍隊に入隊し、戦地に派遣されたり厳しい訓練を受け、軍人精神を叩き込まれた10人の方々に登場していただきました。

どの方も、レイテ沖海戦やラバウルでの戦闘、マニラ戦線、中国での戦闘のほか、無線通信士や航空隊整備術練習生になって日本の軍隊を支え、奇跡的に命をつないだ方々です。



各回とも満員の盛況で、この夏のシリーズを聴講された方は、これまで最高の751人に達しました。

次に4月から9月末までの学校や各種団体に語り手を派遣する事業では、愛知県・名古屋市から依頼を受けて行う平和学習支援事業を含めて13団体、1528人に聞いていただきました。

また、「ピースあいち」へ来館して戦争体験を聞いていただいた人は、17団体、521人に上りました。以上の活動に従事いただいた語り手は、延46人の方々でした。



命の大切さを学んだ——来館した子どもたちの反応

戦後70年という節目の年に当たるせいか、小中学校や各種団体の来館が増えています。

三河湾の離島から、船、バス、地下鉄と乗り継いで3時間近くかけて来てくれた小学5、6年生の子どもたち。「ピースあいち」で語り手やガイドの話を通じて、戦争によってたくさんの人達が死ぬことを知り、命の大切さを学んだと感想文に書いています。

三重県伊勢市からは、117名もの中学生が観光バスで来館。2階の実物資料の展示を見て、戦争の悲惨さと怖さを知り、語り手の話を聞いて、今の平和を維持するためにはどうすればいいかを考えたいとアンケートに答えてくれました。

この他、修学旅行のコースに組み込んで訪れた寝屋川市の小学生や、毎年のように来館する犬山市の中学校もあります。しかし、名古屋市内の小中学校は全体として少ないのが残念です。一度来館した学校は続けて来る傾向があることに希望を抱いています。



豊橋・三ヶ根山へ、戦跡ツアー1月実施

例年10月に行っていた戦跡ツアーを、今年度は1月31日(日)に行います。

場所は豊橋市と、西尾市の三ヶ根山です。豊橋は第15師団があり、師団司令部の建物(愛大内)や正門、陸軍墓地等の戦争遺跡が多く残されています。三ヶ根山は殉国七士廟や比島観音等、慰霊碑がたくさん建てられています。

報告 平和を願う人々の交流会

「第14回平和のための博物館・市民ネットワーク」の全国交流会が、10月24日(土)・25日(日)の2日間に亘って「ピースあいち」で開催されました。全国から平和運動に携わる52人が参加されました。

初日は野間美喜子館長の挨拶のあと、進行役に宮原大輔事務局長を選任し、「中帰連(中国帰還者連絡会)平和記念館」の松村高夫さんはじめ6人の方々が、それぞれの博物館の設立経過と現状を報告、地元からは伊藤泰正さん(豊川海軍工廠跡地保存会会長)と渋井康弘さん(名城大学経済学部教授)の特別報告がありました。その夜は懇親会が「ピースあいち」で持たれました。

翌日は特別報告として、岡村幸宣さん(丸木美術



館)はじめ5人の方が近況を話されました。穏やかな懇談と交流があり、次回の開催地を福島県アウシュヴィッツ平和博物館(予定)に決め、お互いに今後の活動を誓い合って集いを閉じました。

報告 15歳の語り継ぐ戦争 —金城学院中学生の壁新聞とかるた展 7月21日(火)~8月30日(日)

金城学院の3年生の修学旅行は広島への旅。語り部のお話、戦跡めぐり、広島の中高生との交流・被爆ピアノの演奏会。その中で見たこと・聞いたこと・感じたことを一人ひとりが一枚の壁新聞とかるたに表現しました。

「戦争を知らない世代が戦争を語り継ぎ、次の世代に伝えていこうという彼女たちの気持ちが伝わってくるいい企画ですね」(アンケートより)。



報告 ベトナム戦争終結40周年企画 ~あなたはベトナム戦争を知っていますか?~

- ベトナム戦争写真展
11月3日(火)~11月14日(土)
- ドキュメンタリー映画上映会と解説トーク
11月14日(土)

映画：『ハーツ・アンド・マインズ ベトナム戦争の真実』
解説トーク：平田雅己氏 名古屋市立大学准教授(アメリカ外交史)

この企画は、昨年の6月に上映料を「ピースあいち」に寄贈して、『標的の村』の上映会を開催したK氏の再度の提案から始まりました。今年はベトナム戦争終結40年の節目であり、集団的自衛権が問題になっている時だからこそ、ベトナム戦争の映画を見て戦争の悲惨さを知ってほしいというK氏の思いでした。

ベトナム戦争の研究者でもある名市大の平田准教授の解説付き映画上映会のほか、ベトナム戦争の写真展をやりたいというボランティアメンバー4名によって



企画が拡大し、著名な報道写真家・石川文洋氏の写真12枚も借りることができ、展示。とても贅沢な映画上映会と写真展でした。

資料館探訪 14

沖縄の祈りが込められた
平和祈念公園

平和公園は沖縄戦終戦の地摩文仁の丘にある。そこには沖縄県平和祈念資料館、沖縄平和祈念堂、平和の礎、沖縄戦戦没者墓苑等々があり、荘厳な雰囲気である。

沖縄県平和祈念資料館は広島・長崎と並ぶ三大平和資料館である。2階が常設展示室になっており、「庶民の視点で捉えた沖縄戦」を展示している。実物大のガマがつくれ、人形がおかれ、当時の生活の様子が実感できるようになっていたり、沖縄戦の体験を証言集と証言映像で表現したり、工夫がしてあり見ごたえがある。

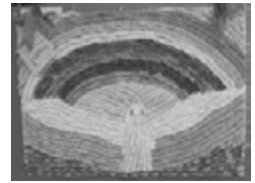


資料館を出ると、すぐに、太平洋が眺められる。太平洋に面したところに「平和の礎(いしじ)」がある。国籍、軍人、民間人を問わず、全ての沖縄戦での戦没者の名が書かれている屏風型の刻銘碑である。24万人余の名が刻まれている。沖縄県民の碑には〇〇〇の子と刻まれたものもある。お腹の中で、母親とともに亡くなった子の存在を残したいという気持ちの表れである。見ていて、涙が出てしまった。(N)

お詫びと訂正

7月4日(土)、南山国際中学高校演劇部の生徒と保護者有志の共演による朗読劇が催されました。聞き手には若い人が多く、小さな子どもさんを連れた方も含め50人を越えました。この集いを伝える先号の記事に誤りがありました。「被爆者の手紙も紹介されました」とありますが、これは紹介されていません。「合唱は終わった」は「朗読は終わった」でした。

また『知名度深まる「ピースあいち」』の記事で、千羽鶴で作った花束を寄贈してくれたのは「寝屋川中学」とありますが、正しくは「寝屋川市立宇谷小学校」でした。今年も来館され、千羽鶴で作った作品(写真)を寄贈してくださいました。



月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

ぜひ「ピースあいち」の会員に!

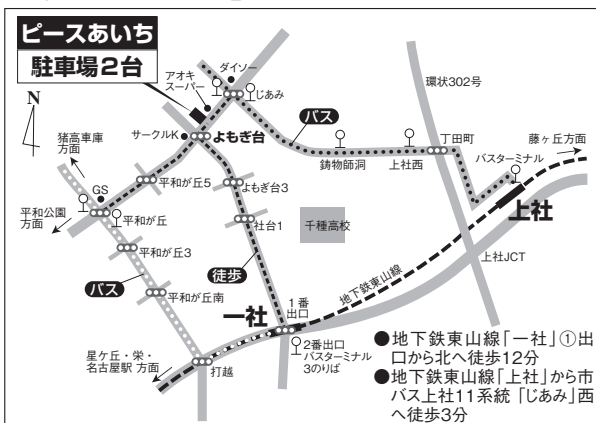
「ピースあいち」の基本財源は、入館料(大人300円・子ども100円)と会員の皆さんの年会費(正会員6000円・賛助会員3000円)です。来館者数は、開館した2007年は約12000人、以後は6000人前後で推移してきました。今年は、戦後70年の節目でもあり、企画展やイベントに力を入れ、広報にも努力したので、例年をやや上回る来館者があります。

しかし、「ピースあいち」の安定した運営のためには、会員の拡大が重要です。現在会員数は約1000名(正会員400名・賛助会員600名)ですが、「ピースあいち」の年間経費約1000万円には大きく足りません。不足分は、寄付金や助成金に頼っているのが現状です。ぜひ多くの方に会員になっていただき、「ピースあいち」を支えてくださいますよう、お願い致します。

【ピースあいちの利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日・年末年始
- 入館料 大人 300円 小中高生 100円
- 2階の常設展示室のほか、1階の「現代の戦争と平和」というテーマの常設展示。ほかにも準常設展示として「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」があります。1階には戦争に関する図書や戦争体験談のDVDライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

「ピースあいち」への交通のご案内



●編集後記●

安倍政権が慌ただしく急いで制定した「安保法制」を「戦争法」と呼び替えたのは社民党の福島瑞穂さんである。これに自民党の議員がクレームをつけた。ところが、安倍政権はこれと同じことをやっている。「武器輸出三原則」を「防衛装備移転」と呼び替えている。モザイクをかけて輸出条件を緩和したのだ。

今秋の内閣改造に当たって安倍政権は「一億総活躍社会」を提言した。先の戦争時、「国民精神総動員運動」というスローガンがあったことを思い出した。この「一億」という言葉が危ない。先の戦争を知っている世代は、「一億総決起」とか「一億玉砕」という言葉を憶えていることだろう。(S)